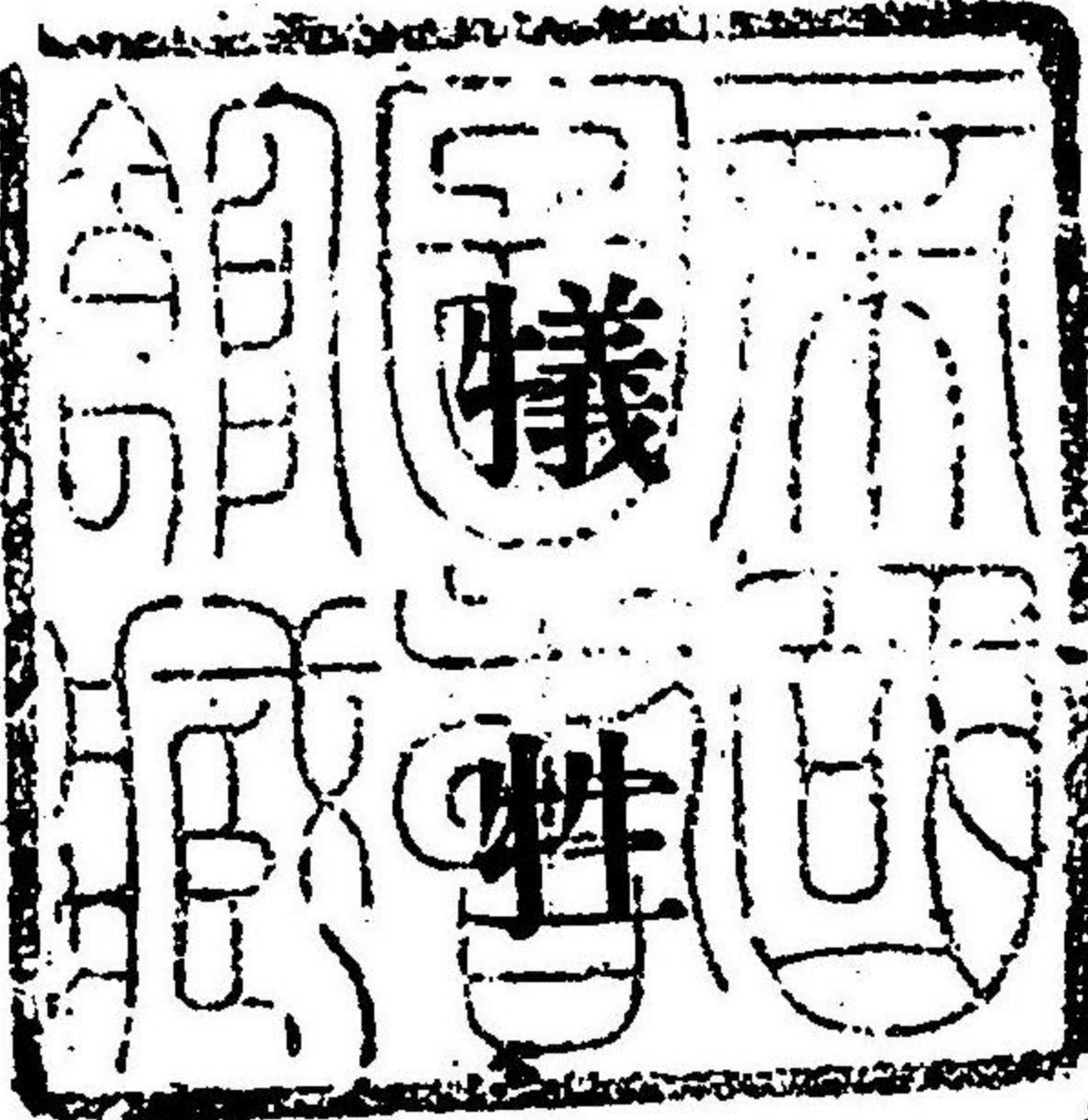


94-523

送呈



高永徳磨譯

ニール博士著

の燈

日本基督教青年會同盟本部

日本基督教青年會 寄贈本



序

英國自由教會名士中の一人にして、ブリチッシ、ウイークリーの
主筆なる博士ロバートソン、ニール、昨年その説教集の一を公けに
し、題して『犠牲の燈』といふ。蓋しジョン、ラスキン著『建築の
七燈』に在る思想より此の名を取りしものなり。收むる所の説教、
おもに基督教生活の犠牲的方面を説き、傳道の精神を奨励せるもの
にかゝる。今その内特に吾人に適切なりと思はるゝもの四つを選ん
で此に譯纂す。言専ら傳道者に對する教訓たる所あれど、以て總て
の人に適用し、其の心を清め志を奨ますべし。

譯者しるす

目次

- 一、ゲテセマネの園……………一
- 二、夜半の使命……………三
- 三、費もし増さらば……………五
- 四、眞の愛の活動……………八

犠牲の燈

ゲテセマネの園

血は流すべしとあらざれば……

(希伯來書九〇二十二)

ロポルトソン、ニコル著
富永徳磨譯

余は全句を引かざるなり。最も低き事にも血を流すことあらざれば何ものも出来ず、何の大いなる結果も、何の成功も、何の勝利もあらざるなり。總ての尊き行爲は何物かを費すを要す、高尚なる事は一として容易に成し遂げられず。血を流すことなくして大事は決

して遂げらるゝものに非ざるなり。人生は此の大きいにして奇異なる
 發見をなすための善き機會なり。然るに多くの人は曾て之をなさず、
 唯だ些細の事を以て始まり、己れの精力の断片を働かせて始まる。
 然れどもやがて何物も之より出て來らざることを見 更に全力の要
 せらるゝことを見るなり。既に全力を盡せば、此外には我等何をも
 有せず。自ら裸にならざるべからざるなり。而も我等は之をも敢て
 す。斯くても目的とせる物は尙手に入らざるなり。其の上投すべき
 もの我等に何か有る。曰く血あり。此を以て終に血は流され、生命
 は棄てられ、而して目とするものは達せらる。總て此世にて高尙なる
 事、永續する事は、血を流すに由て遂げられ、唯だ一の目的に向つ

て心と魂と念ひとを集中するのみならず、生命を間引くこと、進
 進んでは之を切り去るとに由て遂げらるゝものなるを知らば幸ひな
 り。青年は今この事を教へられつゝあるもの、又總て現時の兆候に
 して誤らずば、彼等は將來に於て一層厳しく之を教へらるゝならん。
 血を流すことなくしては何も出來ず。此事は初より人間の心のいと
 奥深くいとおごそかに立證する所たり。原初的宗教思想は多く基督
 教の大福音のため、即ち罪多き者共に代つて主耶穌基督死ぬるてふ
 大福音のため、神が人間の心情と心意とを預め深く準備し置きし
 ものに外ならず。此の立證は英語の言語の中に藏せられあり。『祝
 福』(Bless)なる語は何を意味するか。血(blood)とすふ意味を表は

シアングロサクソン語より取られたるものなり。之を適當に翻譯すれば、我等が他の人を眞實に祝福し得るには、先づ彼のために己れの血を流さざるべからずといふことになるべし。諸君は冷たき水一杯や、些細の贈物や、笑顔や、親切なる言に由て、同胞を幸ひならしむべし。此は基督の眼には大なりと見ゆることどもなり。然れども極度にまで祝福すれば、我等は生命を失はざるべからず。血を流すことなくしては此は達せられぬなり。原初的の宗教は至る所に同じく之を立證す。一の生命は收獲の得らるゝ前に播種地に葬られざるべからずとは人類の疾くより思ひし所なり。コーペンハーゲン市の昔譚に據れば、其の創立者等は屢々失敗を重ねしものにて、其の

工事海水のために打ち毀たれしが、終に人間の生命が犠牲となりしに至り、同市は堅固に建ちしと云ふ。希臘悲劇家の神學は一の深き神學なるが、之よりも亦同じ思想を引くことを得。此等の言ふ所はたとひ粗暴蕪雜なりと雖も、みな人をして耶蘇が死し所の宇宙の至大なる祭壇の方に仰ぎ向かはしむるものなり。即ち「彼れ我等を神に來らせんとて、正しき者正しからざるものゝために」死たる所の祭壇それなり。斯くて永遠の神の子はゲテセマの園に於て血の大なる滴りの如きを滴らせ、己れは汚れなき献物として十字架の上に献げたり。贖ひの教義は人間の獻身及び克己などの用語を以て説明し得べきもの

に非ず。ルドヤード、キプリングが其の著『失敗せし光』(Light that
Fails)の中に、其の人物の一人をして言はしめたる所は眞なり。『我
れ若し能ふべくは彼のために積み置かれある或る罰を受けもせん。
されど不幸にも、人は誰とて其の同胞を救ふこと能はざるなり』。然
かはあれど人の事より推して此の教義を考ふるの助けを得ざるに
もあらず。然り贖ひの教義は其れ無くては我等の心に空無なるもの
ならん。此を以てか常に心の單純なる者は贖罪の此光榮ある眞理を
平易に説かれて之を受け之を理解し直ちに之に飛ひつくに反し、心
が思辨と所謂學殖とを以て負ひあぐめる者は之を解し難く感ずるこ
と多きが如し。驚くべし、神學者の中、否福音的の神學者中にあへ、

極めて曖昧なる遁辭と狡猾なる辭とを用ひて、傳道者が何事をなす
にも終始必要なる一の武器を自己の手より奪はんとするを見ること
や。然れども我等は知る。若し基督ゲテセマネ園とカルバリ山とに
て、血を流すまで世に居らざりしならば、其の世に來りしことは、
何の目的もなく、何の結論をも有せざりしものなることを。我等を
贖ふために基督如何ほどの代價を拂ひしやを知るためには、希伯來
書の著者と共にゲテセマ子とカルバリとを見ざるべからず。然も
尙其れにても我等は尙之を知れりとはする能はざるなり。

贖はれたる者一人として

主か其の迷ひし羊を見出だせしまでに

涉水し水の如何に深かりしか
あかせし夜の如何に暗かりしかを

知るものなし

然れども我等は幾分かを知れり。我等基督が其の杯のにがさを十分
分に味ひ知りし真中の状を思ひ、又烈しき號泣と涙とを以て『若し
かなはゞ此の杯を我より放ち玉へ』と祈り玉へるを思ふ。思へ其
の transient calix (杯を放ち玉へ)を。未だ曾て斯くの如き祈りなし。
斯くの如く切に祈られし祈なし。杯の離るゝことも必ず出來得べく
見ゆる時、言ひ分けを以て之を決し得べく見ゆる時に於て、さしげ
らるゝ所の祈りは、祈り其物が既に血を流すことなり。我等は彼の

茫然 傍に在りし證人のことをも思ひ出づるなり、彼等は遙に切れ
切れなる嘆きの聲、歎歎の聲を聞き、又敗北のやうに見えて實は苦
闘の賜たりし勝利を目睹しつゝ、一時も彼と共に目を醒まし居るこ
と能はざりし者共なり。同情溢れて心の冴えたる天使が、彼の助
けとして來りし時は、其の奮勵の甚だしき時なりしを思ふなり。神
その使を暗中に於ける火の焔となせしことなかりせば、基督の勝を
得られしやは疑問とすべし。杯は放されざりき、然も祈りは應へら
れたり、何となれば其の唇強くせられて之を飲むに堪ふるに至りた
ればなり。ゲテセマネは救主の苦の絶頂にして、カルバリーは其の
事業を成し了りし所なりと言ふ人あるは、蓋し誤れるに非ざるべし。

但し余は之を斷言する能はず。基督は又カルバリーにても震慄したる刹那ありたればなり。

余は此に唯だ語原に由て思ひ付ける二つの思想を説き明さんとす。

前に言へる如く『祝福』は血を流すことを意味するものなるが、血 (blood) は又花 (bloom and blossom) てふ語と關係あり。即ち人生の

盛りと冠とは死より咲き出でたりてふ意あるなり。斯くて第一には祝福は他人のために血を流すより來ることを説き、次に我等の生涯の盛盈は死より出で來ることを説かんと欲す。

一、祝福は流血より來る。最も高き意味に於て人に祝福を與ふる我等の力は、血の大いなる滴りを流すことより來る。教會は殉教者を

第一位に置きしが、我等は文字通りに血を流さずとも可し。天主教會は殉教者のために祈ることなし。唯だ殉教者の祈りを求む。同教會は殉教者等は紅の衣を着て基督の前に在り、聖徒等は白の衣を着たりとなす。殉教者の血は教會の種子なり、我等は贖ひをなし得ず、唯だ祝福を與へ得るもの、一つの完全犠牲、此世の晩祭の一部たること能はず、唯だ基督の苦難に洩れたる所を充たすもののみ、神は眞實に基督の總ての大いなる僕共に付て『我れ我が名のために彼れが如何に大いなる苦みを受けざるべからざるかを彼に示さん』と言ひ玉ふなり。然れども若し價あるものは苦痛にして辛勞には之なしと思はゞ甚だ誤れり。眞を言へば苦痛なき辛勞は價なく、結實多き

生活に於ては二者結び着いて離すべからざるなり、「我れ基督と共に十字架につけられたり。我は毎日に死ねり」とは、使徒が苦難を表はさんがために恐ろしき言を用ひたる大いなる句にして、我等のみな熟知する所。眞に此の方角に犠牲と流血とは存するなり。然れども此れと等しく、基督に恵まれたる僕どもの生活には、唯だ一つの大いなるゲテセマネ在りてふことも眞なり。多くの人は一つだも之を有せず、其の事業は小を以て終る。然れども選ばれたる者は群を抜いて聳ゆる一つのゲテセマネを有す。一の流血、一つの死を有す。之をすぐれば他のものは平易に思はるゝなり。我等は他人のゲテセマネを知り得るや。然らざる場合多し。他人のゲテセマネは通例其

の兆候さへも殆ど目に入らずして過ぎ行くなり。小説「ボンニー、ブリア、ブッシュ」中のジョルジ、ホウが死を待たんために家に歸り、車が階段の外に止まるや、其母は彼の顔を見んとてラバルサム樹の下に身を隠せり。マグレット(母)は自らの豫ねて恐れ居りし事の今明かに現はれしを見、斯くて黄金の花その顔に落ちかゝる中に自己のゲテセマネを通過したり。諸君は今諸君のゲテセマネを通過しつゝあらん。而して之を外に示すの途は殆ど存せず、或は容子の何となく常ならぬこと、唇の軽く引きつる位はありもせんか、其の以上は何の異なる様も見えず、何人にも之を語りもせねば、死し後とて之を見出だす人はなからん。或人は他の人の生命を棄て、通過せしゲ

テセマネを疑ふやも知れず、然れども此れ甚だ誤れり、其人の思想中に在る克己折節は實に怨言さもせず、厭ひもせずして果されしなり。多くの傳記中に於て之あり。我等は時として己が見もせぬものを見たりと思ふものなり。夫れゲテセマネは長く心を充たし、思ひを占領せし野心の刈除たること少しとせず。樂しき歌の破碎たり、快き夢の攪破たることあり、愛情の中斷たり、自己を引き留むる柔しき人情より魂を切り放す刃たるもの無きにあらず。何れにせよ心の痛みは終生續くと雖も、胸一杯の苦悶は唯だ一時のものたるに止まるなり。『汝等一時も我と共に目をさまし居ること能はざるか』。余は時として思ふことあり。流血は我等か思ふよりは甚だ普通に存す

ることなり。有るべくも思はれぬ人に之あるなりと。博士ラレーは成功せる市外傳道者にして、此世の野心をも成し遂げたる一人なるが、此人の紀念書の中に甚だ意義深き一節あり。其の名稱の最も籍甚なりし時、彼れ人に言て曰く、多くの傳道者は來つて會衆に充て、我教會を見廻はし、己が地位を羨みたり、彼は余が此に至るまで如何ほどの價を拂ひしやを知らぬなりと。亦ジエームス、ハミルトンの傳に於ても、我等は彼か基督のために、其の大いなる野心を擲ちしことを見る。彼はエラスムスの傳を著はさんと欲し、之が準備に多くの年月を献げたりしが、他の事を爲せとの要求來りて、前の長さ願ひを棄てさせられたり。自ら記して曰く『此を以て余は其

の日多少の懐しさを感ぜつゝも、十一の大形の本を書棚にかへし、己れの筆記帳をば一つに括り、斯くて計劃をば抛ちぬ。此の計劃を疲れし時の慰めとなりしもの、其を思ふばかりにても余は己れの自然の情心に打ち勝ち居たりしものなり。然れども之を斷行せしは善かりしなり。此は余が文學に少しばかりの名聲を得るの唯一の機會たりしものなるが、然かく甚だしく心を高ぶらせしものは、人に知られずして止むを優れりとするなり』と。我等はヘンリー、マーチンの生涯に於て、ゲテセマネは何所に在りしやを容易に見るを得るを覺ゆ、又ジョン、ウエスレーの生活に於ても之を見る人あるべし。余此に之を擧げんとはせざるべし。唯だ心の苦しさを知るものは心

なり。我等が知る所は、基督教生活のゲテセマネは義務の途に於て來り、毎日啓示せらるゝ所の神の意志に服従することに於て來ると是れなり。

ウエスレー派の人々は常に祝福の流血より來り、生命を棄つることより來らざるべからざるを認めたり。此に引き得べき言は甚だ多けれど、唯だ二つを以て満足せんは、人々に聖徒と稱せられし人に付てジョン、ウエスレーは之を未だ聖徒と稱すべからずとなし「此には殉教者の血なく、譴責せられしこともなく、十字架の辱めもなく、神らしく生くる者に至る迫害なし』と言へり。博士アダム、クラーク千八百十六年倫敦ウエスレーアン、メソヂスト宣教會社の創

立に於ける演説中に、特にモラビアン派のことに説き及ぼしたることあり。初代のメソヂストに於けるモラビアンの感化如何に大なりしかは此に言ふの要なし。クラークは唯だ其の聴衆に向つて、モラビアンは其の數六百に過ぎざりし時に於て、其の宣教師を全世界に出だし在りたることを言へり。其の初を尋ねれば、アントニーと呼べる黒人聖トマスといふ地より來り、チンチエンドルフの感化の下に過せしが、彼は其の同輩たる奴隸等が眞の神を説くの宣教師を切りに求めつゝあるを語り、且つ宣教師は自ら奴隸となりて赴くに非ざれば之に入り行く途なしと言ひぬ。之を聞くやレオナルド、ドール及ビトビアス、レオホルドと呼ぶ二人は、直ちに自らを獻げて、

基督を説くために奴隸に賣られんと欲することを言ひ顯はせしといふ次第なりき。我等が事實を知ると知らぬとに關はらず、ゲテセマネなく生命を棄つることなく、血の大なる滴を流すことなくして實を結ぶ生活のあらぬ事は確なり。然も救主の血、咒はれたる地に落ちて之を祝福せし如く、自らを捐てたる靈の血は、ゲテセマネを花園となす。現在に於て然らずとするも將來に於ては然り。早さか晩さか其時は來るなり。

二、教を宣ぶる者の生命の花と盛りとは血を流すとより咲き出づ。斯く言ふは他人に與ふる祝福を指せるに非ず、我等が此の世の生命を傾け盡して費し了りさへすれば必ず之が後に來り、必ず之に代つ

て豊富に備へられたる靈の生命あり。此の靈の生命となつて我等自らに來る所の祝福を指して言へるなり。此世の生命を棄つること、血を流すこと、此世より死ぬることの後に來るものは抑も何ぞや。種々なるもの來るなり、然れど來るべきは復活の生命なり、血を流すこと實に此の生命の備へをなす。

此の復活の生命は必ずしも忠誠なる生涯を送りし神の僕にみな來るものには非ず。實の多き事業をなしたるものにして、而も此の復活の生命の十分なる祝福を有せざるものあるなり。

(一) 此世に暫く留まることが靈に取りてのゲテセマ子なる場合少からず。人餘りに多くの事を迎へ送るときは、精神は其の力を復する

に堪へざらんとするが如く感せらる。教會の人々の心に取りて特に尊くして、其の類の稀に見ゆる書物はゲテセマネ冊子とも稱すべき種類のものなり、其の重なる物を擧ぐればブレイナルド、マーチン、及びマクチエーン等の傳記なり。此等の人々は皆な若くして死に、神の祝福の徴なきにはあらざるも、而も世を蚤くし、其の豊富にして熱烈なる性質は消費せられ燃え盡されたり。固より身體の原因理由の之に存せしは見落すべからざれども、然も何れにもゲテセマネのありしことは明かなり。ブレイナルドの紀念書はウエスレー之を縮略して發行せしが、試みに之を讀て見よ。著者は亞米利加の大知識ジョナサン、エドワードなり。其の控へ制したる熱情溢りたる

柔和を見よ。又うらわかき身を以て、直ちに許婚の夫の後を追ひ行
 きしジエルシヤ、エドワードの物語を讀め。諸君の仕事は至て平易
 なるものなるを感ぜん。乞ふブレイナルドの仰望を見よ。『あゝ我は
 我神の務めに於て一の燃ゆる火たらんことを願ふ。主よ我れ此に在
 り。我を送り玉へ。我を地の極に送り玉へ。我を曠野の粗野なる偶
 像教の野蠻人に送り玉へ、我を生活の樂みとか此世の樂しみとか言
 へるものより全く外に送り出だし玉へ。若し汝の務の範圍内に在り、
 汝の御國を擴張することならば、死その物にさへ我を送り玉へ』と。
 (二)時として此の世の生命をば棄て、も復活の生命を十分に之に代
 へられずして、悲哀たゞいつまでも引き續く場合あり。憚らずして

言へばチャールズ、ウエスレーの生活に於て然るものありき。此の
 大なる聖徒、拔群の基督教詩人を最も深く景仰せる人々も、彼の
 生涯の終りの三十年が、其の壯大にして精力に充ち熱情に富みし青
 年時代と比較すべからざることを思ふならん。其等の年月は概して
 悲しき年月、比較的活動なく費されたる年月、疲れて氣力なく満
 足なき年月なりき。其の作りし讚美歌の哀調には一種人の心を引く
 の力なきに非ず。然も新約全書の中にある哀調の如きものとは之
 に缺け居れること忘らるべからざるなり。例へば

我が六十年を我は苦み盡せり
 救者の來るまで

と云ふが如き

我が不幸の生活を解き明かし玉へ

我が身に關する汝が愛の全經綸に由て

と云ふが如き其の類なり、多くの方面に於て美にして人の心を奪ふものありと雖も、眞實に基督教的にはあらざるなり、チャールズ、ウエスレーの後半生の標語、いつも彼の名と聯想せられざるべからざる標語は、『我は火の中を通し三分の一を持ち來るべし』といふ其れなりき。彼れ思へらく、メソヂスト信徒の三分の一は終りまで忍ぶならんと。彼は自らのためにも決して天國に大いなる様にて入らんことを求めざりき。『我は船の破れし板片に取りつきて、彼岸に

安らかに達せん。彼岸に安らかに達せんこと此れ日毎時毎の余か祈なり』求めし所たゞ此に過ぎざりしなり。其の晩年に於ては己れを招きし人々をば常に戒むるに、英國の宗教を掃蕩する洪水の來らんとせることを以てせり。此れ決して最高又は正規の基督敎生活にあらず。我等のゲテセマは、憂鬱悲哀に於て終るべき意味のものに非ず。我等のゲテセマは、神の恵みに由りて、我等が失ひしもの代りに、豊かなる生命、否限りなき生命をさへも與ふることを意味するものなり。我等の苦痛は善用されざるべからず、何となれば『此の限りある人生の旅に於て、徒消されたる影は、徒消されたる日向よりも更に悪しければなり』。

(三)否、生命の花は死より咲き出づ。復活の生命は枯渴せる血管に
 注ぎ入り、精力と平和とを以て之を充たす。此れ最も著しくジョ
 ン、ウエスレーの経験したる所なり。一枝又一枝枯れ行けども、新ら
 しき生命は毎刻總ての乾きたる纖維に突入り、再び美はしく花と
 なりて咲く。謹んで惟ふに、ジョン、ウエスレーの日記の如き書は世
 界またとあるべからず。此れ特に此世に生きたる復活の生命の書な
 り。之と比すべきものは甚だ稀にして、實に基督教文學中獨歩の地
 位を有す。主の前の常磐の木なり。其の中に記されたる心は、最後
 まで其の罪なき愉快と趣味とを維持せるが、然も極めて弛く極めて
 軽く之を維持して深く拘泥せず、之と同時に基督教の熱烈なる平和、

終りに至るまで次第に成長せるを見る。昔の熱誠、昔の熱望、静か
 なれど而も烈しくして外に顯はれ來る雄辯「終に至るまで減ずるこ
 となくして、却つて加はれるものあり。ジョン、ウエスレーは實に
 内心の平静を獲得したる人、所謂第二の休息に入りし人の一人なり、
 即ち彼自らの言を借りて言へば「家に歸る前に休息を得たる人、神
 の民のために此世にさへも殘し置かれある休息を取りし人」の一人
 なり。特別にジョン、ウエスレーを愛し且つ敬ぶ者は、想像を以て
 彼が最後の日の様を見、又レザーヘッドに於て「エホバに會ひ得る
 時に汝等エホバを尋ねよ、エホバ近く在す時に汝等彼を呼べ」とい
 ふ語に付て、其の最後の説教をなせる彼に従ひ行き、又其の勝利を

以て達したる死の床に侍して、「雲は美味を滴らす」と言ひしを聞くべきなり。唯一人ジョン、ウエスレーと比すべきは使徒エリオットか。エリオットは印度人へ宣教したる人にして、其の傳はコットン、マザアの美はしく記せる所。新英洲にてはエリオットある時に國安全なりと常に言はれ居たるなり。ホーソルンは其著『緋文字』中の主人公が、其の身を刻む如き憂悶の中に、如何にエリオットを思ひ出でて之を訪ひ行きしかを記せり。ジョン、ウエスレーと並ぶべき此の大聖者は、甚だ靜肅の人なりしを見る。其の顔は殆ど超自然の光りを以て輝きぬ。然も彼は非常に深き悲みを有したり。其の子等は「頼もしき福音の説教者」たりしに、父に先たつて死にたり。

而も彼は「いと神聖なる無頓着を以て」彼等を献げたりとあり。此世の美を見ること瀕死の人の之を見ると同じし程に彼は主耶蘇基督の十字架に身をつけ居りしなり。齡おほいに進み、最後いよく近づくや、彼はウエスレーの如く、前よりも「一層天に屬するものらしく、一層かぐはしく、一層神々しくなりて、彼が今しも達せんとせる芳香の國の匂ひを一層多く匂はせたり」

之を皆な我等に適用するときは如何なる事になるか。其は甚だ明かなることなり。余は「エホバを知るの知識は水の海を掩ふか如く地を掩はん」といふ古語を信ず。然れども先づ信仰ある靈魂の流したる血、地上に落つるを要す。肉體の生命を失ふことより外には生命

なし。余か愛する或青年は當代に於て全世界を福音化せんとする計劃を有せり。然り。然れど福音化とは抑も何を云ふか。聖書の發送か。凡ての人へ福音を聽かすることか。否々、唯だ到る所に於て神の僕どもの血を流すことのみ。全世界が一大ゲテセマネとなりし時にこそ、我等は基督が其の額より血を滴らせし園に生じ、其所より外には生せざる所の花を、全世界に見るべきなれ。然れども此の説教を聽ける人々の中にて、或る殊勝なる母は自らのゲテセマネを感じ、其子をさぐぐることをすべし。喪服を着けたる一人の婦人あり。宗教會社に寄附せしやと問はれしとき答へて言ひけるは、『然り我は我が獨子を献げたり。然るに彼は其の地にて死にけり』

と。或人は此の説教を聽き、此の所にてゲテセマネを感じ、自らの心を開いて、聖靈の生命を漲り入らせんために歸り、大いなる言と業の歲月に首途すべし。願はくば然かあれかし。余は人々が其の親しき者善く死にしといへるを聞けり。余が以上述べたる所の此の世の死に付ては、チャールズ、ウエスレーの言もつとも適當に之を言ひ顯はせり。

あゝ死の懐かしき姿よ

此世にて何物の光景か斯く美しくしき

我等は生命に價せる物を献ぐるまでは何をも献げしに非ざるなり。死なくしては生命なし、ゲテセマネは神の花園なり。

夜半の使命

我が朋友旅より來りしに供ふべき物なし

(路加十一〇六)

多くの人は此語が我等自らの事情に深く適用せらるべきものなることを感じたること多次ならん。時は夜半なり。助を受くる者は我等の友人なり。世には同胞の誼といふ帶ありて、我等この憐れむべき人類、即ち唯た苦む力のみの強き人類を一つに結び合はせ居れることなるが、我等は此の悲しき帶を以て、此の懇願者と相繋がれ居れり。友は其の旅路にあるもの。一の行旅者なり。我等と同じく人

生の此の難道を歩み行くものなり。疲れて足よりは血を出だし、重荷をは負ひあぐみ、夜半に其の要するものを懇求せり。夫れ朝のため福音を見出だすは容易なり。朝其自身が一の福音なればなり。日中のための福音を見出だすも容易なり。萬事が最も輝き最も熱し、生活の事務、快樂のための活動が、全く心を奪ふ時なればなり。然れとも日は暮れて夕となる。初めには武器を思ふままに用ひ、之を手の内のものとして使ひ、手軽く、機敏に、迅速に戦ひしもの、終には其の戦ひの無益なりしことを見るに至り、斯くて夜半は我等を服し了るなり、我等は俄に人間の精力の限界線に行き詰まり、身は神に非ず、唯だ人なりしことを見出だし、此に於て心は疲れ果て、

其の疲れを更に顔色にあらはしつゝ、往きて友人に求むるなり。友人も力及ばぬに心を打たれ、詮術なき憐憫の心に急に胸を衝かれつゝ、己れは此の萬事の終末と思はるゝ夜半、朝の絶えて芽ぐみ居らぬ夜半に、遠方より來りし旅人のため、何の供ふべきものをも有せぬ身なるを確かむるなり。

然れとも基督教は夜半のための宗教なり。聖書に於ける夜半は、神の大いなる援助と救ひとの時なり、イスラエルの民族が強壓的に埃及より引き出だされたるも夜半なり。エホバの使アツスリヤの陣營を打ちしも夜半なり。鐵の門自づから開けしも夜半なり。囚人等がパオロとシラスの歌ふを聞きしも夜半なり。生命の主が岩より成る

墓の中にて目を醒まし、「我れ起きて我父へ行かん」と言ひしも夜半なり。『夜半に我れ起きて汝の正しき審判の故に汝に感謝せん』とあり。彼れ感謝せし時に、鐵の門を折り、死の門を碎きたり。斯くて夜半に於て何人にも我等に就いて救ひの神を求むる者に對し、我等は之れを説くことを得るなり。此れ即ち我等か夜半遠來の旅人に供する所の物なり。我等の彼の前に供すへきは父なる神なり。然るに多くの人此の單純なる使命より遠かれり。記して曰く基督は死せり。義者不義者に代りて死にしなりと。何のためぞ。彼れ我等を神に携へ來らんがためなり。彼の死、彼の復活、彼の昇天、彼れの仲保など、救主の事業の目的の全體は、人を父なる神に携へ來ら

んことに在り。熱病の熱の去りて、我等か息むは、神に携へ至られたる時なり。多くの人は賜を與ふる者のことを説くこと少くして、却て賜の方を説くこと餘りに多し。靈魂は叫ひ出ださん。『汝のものにあらで汝をこそ』と。我等をして神の膝下に至らしめよ、能事こゝに了れり。與ふる者なくては賜ものは得べからず。然も我等には屢々之を有り得る事と信ぜんとする誘感あり。基督の事業に付て低くして解し易き解明に満足せんとするは我等に來る誘感なり。然れども此は不完全極まれるものなり。『彼は我等を神に來らせん』。是れより外の目的はあるべからず。神は凡ての祈りの答へなり。凡ての要求の供給なり。

此に靈魂の夜半の事を述べて時を費すは不必要なり。悔恨、悲愁、絶望の夜半は其れなり。千百の望、運命の一撃に由て飛散せし時、これ夜半なり。我等の境界標の變化するるとき、大いなる影が世界を染め之を凍らせし時、暗黒が不意に萬事に襲ひかゝる時、これ夜半なり。其等の夜半は單に我等の物質的の精力を獲すのみならず、信仰の防備をさへも掃蕩するが如く思はる。然れども若し基督我等を神に至らしむるならば、夜は明けて勝利となるなり。

一、神恩の小説中に『汝の弟死にて復た生き、失ひて復た得たり』てふ語あり。此の語の順序こそ眞の順序といふべけれ、失ひたる者を家に歸らすは、死しものを甦らすよりも甚だ大く且難き事なり。

博士デール、大監督テートが其の子を喪ひし時、慰めの書状を送り、其中に一人の子を死に由て失ふは之を罪に由て失ふよりも遙に優れりといふことを言へり。我等は皆な其の然るを知る。然れども此に暫く罪と死といふ順にて説く所あらん。我等は先づ罪の夜半に於て己が許に來れる行旅中の友人に何を言ひ得るか、乞ふ放蕩子の醫より之を學べ。基督、祭司となり贄となりて、此世の犠牲を献けし時、其の成し遂げしことは何なりしか、此は我等の常に説ける所にして説きし所また正しかりしを知る。如何に又其の代贖の供物に於て、彼は信ずる者を罪と罰と罪の力とより解き放ちしか。此れ又我等の述べ來れる所なり。我等は神學者として赦罪の意味を論じ、甚だ善

く之を論ぜり。我等は赦罪てふことが何所まで罪の結果より解放し、因縁の鏈を破壊する意味なるかを見出たさんと勉めたり。然り、然れども此等の何れよりも單純にして而も深き言あり。基督は其の生活と死とに由て我等を神に持ち行く、我等は神に携へ至らるゝ時に赦さるるなり。救ひは放蕩子と愛ある其の父の會合なり。兩者會合せる時、罪人の唇が接吻せられて樂しき沈黙となる時、赦しの愛大いに溢れ出て、其の言の押し止めらるゝ時、これ赦罪なりの言ひ換ふれば赦罪は和解なり。若し我等其子の死に由て神に和解せらるれば、萬事は我等のために成り、萬事は甚だ好く行はれたるなり、未來に付て少しの恐怖も存せざるなり。

赦しのことを言はざれ、暗は去りたり

日の在る時に夜のために赦しを求むべけんや

過去のことを言ふ勿れ、未來を恐るゝ勿れ

愛する者よ、汝の此に在るを知らば足れり

此れ我等の父の我等に言ふ所なり。彼は我等に會合せんとて遠く走り來り十字架にさへ上れり。其の我等に會合するや、其の愛は我等の靈魂の諸の纖維を震はせ、温かさ夢の霜を以て我等を包めり。而して其の夢は現實となりて來るなり。否寧ろ夢も現實の來り觸るゝに由て、恐怖と諸共に碎け失するの時、其れを即ち言ひ知れぬ尊き時なり、然り幕は其所に落つべきなり。人を人が赦す眞の赦しは常

に相互の赦しのやうに思はるゝことなるが、斯くの如き人間同志の間にも、我等は人を赦す時には、眞の意味に於て終末に達せしことを感ず。ウイリアム、ブレークの語に曰く

されば永遠の間何時何所にも

我は汝を赦さん、汝は我を赦せかし。

我等の愛する救主が

此れ酒なり此れ麵包なりと言ひ給ひし如く

然れども或は問ふ人あらん。此の極まりなき歡喜と休息との時すぎし後は如何になりしかと。放蕩子と父とは朝に目醒めし時には、多くの事に接觸せざるを得ざりしならん。彼等は之に接觸し、墓に至

るまで之と戦ふべきものならん。長さ間世界は冷え果て、望みなく見ゆるものあらん。邪なる過去の荒地よりは結果續出し來ること頻々たらん。罪案書は齎らされん。此は如何にか決せられざるべからず。肉體的精神的の報復は至りて、兩人を惱まし驚かすものあらん。彼等は百千回問ふならん。神に乞ふときは、永遠に磨きては磨き居れる大なる臼を押し止むることあり得べきか、神は賤の緒環の如き事情を解いて、事を曾て之あらざりしかの如くならしむべきかと。然り是れ皆な眞なり。然れども此に述べし出來事に於ては父と子とは友なり。最も美はしきことには、彼等は其の結果に共に衝れり。愛は萬事を變へ、之を回贖す。若し此世の赦罪に於て是れ

を眞とせば、まして神の赦しに於てをや。來る所の結果に當らんとするは、神と父と過ちし子と皆な僭なり。何の恐れかあらん。彼等は共に共に長子に接衝せんとし、更に恐るべく更に和解し難き敵に接衝せんとす。然れども之に接衝するは二人なり、二人の一人は神なり、神我等に味方せば誰か彼等に敵し得ん、神いかてか其の愛子を信じ愛する靈魂を活かし清め救ふことを計らざらんや。彼は我等が堪ふるに必要なるものより以上に、我等に堪ふべきものを與へざるべく、其の力を與へて堪ふるを得しむべし。彼等は天父が和解せられしことを知り手を携へて過去を棄て未來を造りつゝあること知らば其れにて足れり。されば乞ふ我等をして夜半に於て父なる神の

愛を友人に説かしめよ。基督の贖ひの來るは、父の愛の泉より、來るなり、神の子自身が其の自由のものたるを以てして、而して父の意をなさんために來れるなり。『世は我が父を愛することを知るべし。父の我に命ぜし所は、我れ之をなしたればなり』。此れ彼が起つて其所を出て行きし時に言ひし所とす。天父の膝下に人類を至らせしまで、『汝の我に賜ひし者は一人だに亡びざりき』と言ひ得し時までは、彼は其の我等に關はる事業を成せしに非ざりしなり。現在行はるゝ如き基督教の型は、多くの關係に於て舊約全書の型に及ばざる感なきを得ず、詩篇の中に充てる熱情、即ち賜を全く思はずして神を樂むの心は今日何所に在りや。『あゝ神よ、汝は我神なり。

り。我れ切に汝を尋ね求む。水なき燥きおとろへたる地に在る如く、我が靈魂は渴きて汝を望み、我が肉體は汝を戀ひ慕ふ。曩にも我れかくの如く大權と光榮とを見んことを願ひ、聖所に在りて目を汝より離れしめざりき……我れ床に在て汝を思ひ出で、夜の更くるまゝに汝を深く思はん……我靈は汝を慕ひ追ふ。汝の右の手は我を支ふるなり。』神を見出たし、神を喜ぶ、此れ我等の總てなり。

二、罪の夜半に付て眞なる所は死の夜半に付ても眞なり。基督教の思想にては、死は我等を神と共に會せしむ。基督信徒の慰めに關する文學、特に其の輓近のものは、此の大眞理を認むること甚だ輕

し、其等は死を以て切れたる關係を結び合はす者、長く愛し暫く失へる者共を返す者と言へり。其等は死を以て切斷者と思へり。心が如何に斯かる慰諭を切望し、斯かる慰諭が如何に真にして神來なるかは、我等の善く知る所なり。然れども我等第一に死を以て己が愛したるものに己れを至らしむるものと思はじ、其は自らを犯し又天父を犯す者なり、死の針の引き去らるゝは、我等が死は己れを神に携へ行くものなりと知る時に在り。然は云へ、其は過ちなりとしても、乞ふ我等をしておとなしく其の過ちを暫く續くるを許せかし。我等は死の伴ひ來る恐ろしき感覺、即ち此は避くべからざることにありてふ感を経験したり。多數の人は凡ての愛と柔和とが全く塵と灰

とに歸し、死ぬる美はしき物の幽靈に由て欺かれしを覺ゆるなり。心が如何ばかり熱烈なる切望と熱烈なる悔恨にて劈かるゝかは人の知る所。香氣と味とは人生より立ち去れり。余は其の様を説明する能はず。然れども、己が愛する者に由らずしては快樂毫も得べからざることは多數の人に取って眞なり。我等は多くの物、此の世界か藏するほどの凡ての善き賜を切に求めしなり。多年徒勞の後、勝利の瞬間は來り、快樂の河は足下に流れ來り、之には水溢れたり、然も尙己れには達せざるなり。全宇宙を獻げ來りても尙甲斐なきを覺ゆ、我等は流れの畔に立ちてなほも渴いて已まざるなり。其の水は口の達せざる所を流れ居れり、水は豊富なれども屈みて之を汲む

べきの盃我等になし。己が務めしは母のため、妻のため、兒女のためなりき。己が報を受け、知られんと切望せしは、彼等のためにせしなりき。今や彼等逝けり。何所に知らるゝてふことありや。若かりし昔の日こそ戀しけれ。其の時は河は水少かりしも、我等は之を汲むの盃を有したり。願望は着手せられぬ、之を少き時の野心の夢に比ぶれば、宵壤雷ならず行はれたるならんも、然も我等は其の奮闘の時代に於て甚だ幸福を感じたり、子を失へる人言て曰く、「最後の息を引き取り、我が十三年間の熱烈なる鍾愛、我が誇り、我が望み、多年養育の苦心、凡て其等の果に、唯だ癒れたる柔かさ體のみを余に残したる時には、余は出て、夜半に戸外を歩み廻り、我兒を

ば死に委せ置きぬ。只だ一小兒の死に過ぎず、人生普通のこと、家族ある所殆ど之なきはなき普通のことなれども、然も此は余の生涯に新らしき色を着け、普通の憂愁に對する同情を永久に築き、總て子を失ひて、其の將來の望み、餘りに早く飛び去り、愛の園樂に永遠の空隙を生じたる父母と、悲みを同うする心を築き上げたり。此れ悲哀の人類同胞帯にして甚だ神聖なるもの、其の在る所を高くし聖別するもの、人生の學校の最も深き課程なり。余の足は余の小兒時代の在所より遠く吟行ひ出てたり。余が思想の小兒時代の信仰より吟行ひ出てたることは更に遠し。然れども自ら何所に在り、又如何に在るにせよ、此の憂愁は屢々余を捉へ、暫く言なき涙の中に引

止む。余は曾て此の損失に對する慰めを見出ださざりき。此は未來と其の最も樂しき夢とを曳き行きたればなり」と神の言たる聖書の語は此の要求に答へ居れるを見る。若し之なくば固より神の言にはあらずなり。愛は總ての曠野を經回り、總ての海に呼はり、總ての墓の戸を叩き、己れを舊に返してと言ふ。神は愛なれば之を聽かて在り得べくもあらず、之を聽かてあらずならん。耶穌に在て眠れる者をば、神はまた耶穌と共に携へ至るべし。我等は之を斯く説くことを得心より之を説く。然れども死は何よりも先に我等を基督に至らしむ。神に至らしむ。近代の説教が未來の祝福の生活を説くは善けれども、人をして其の生活に於ては、現世に於けると同

じく、神が背後に隠れ居ること多きやう、思はしめつゝあることなきか。是れ余の恐るゝ所なり。確に一種の信仰あり。未來の世界にては、我等自らと愛する者との關係、全く柔和なる者安全なる者となり、神は遠き所に在し、舊の如く背後にあるもの、舊の如く助けを與ふるもの、舊の如く祈に答ふるものとして在し、少しも其れより近くは在さずと信ぜらる。然れども我等は之のみにては尙ほ足らず、之よりも以上を要求するなり。ローウェル亡せし人に付て記せし少時の詩に曰く

其のおとづれ來る足音を

終生待ちやめぬ耳あるなり

然るに後に至ては曰く、「此の十九世紀てふものが、我等の生命の初期に有せし信仰の中より取つて我等に残したるものは、唯だ「誰が知れりや」といひ又「我は其の然かあらんことを實に願へりや」といふことのみなり」と。

靈魂不滅の信仰は、父なる神に於ける生ける信仰なくしては決して維持せらるべきに非ず、新約全書に於ては、此世を去ることは基督と共に在ることにして、遙かに善き事なり。我等基督の現はれんとさは、自らの彼に似んことを知る。そは我等彼の眞の相を見るべければなり。我等を覆へる時と五官と距離との被覆は掻いやられて、我等は面を合はせて見るべく、彼方の岸にて我等に會合するものは

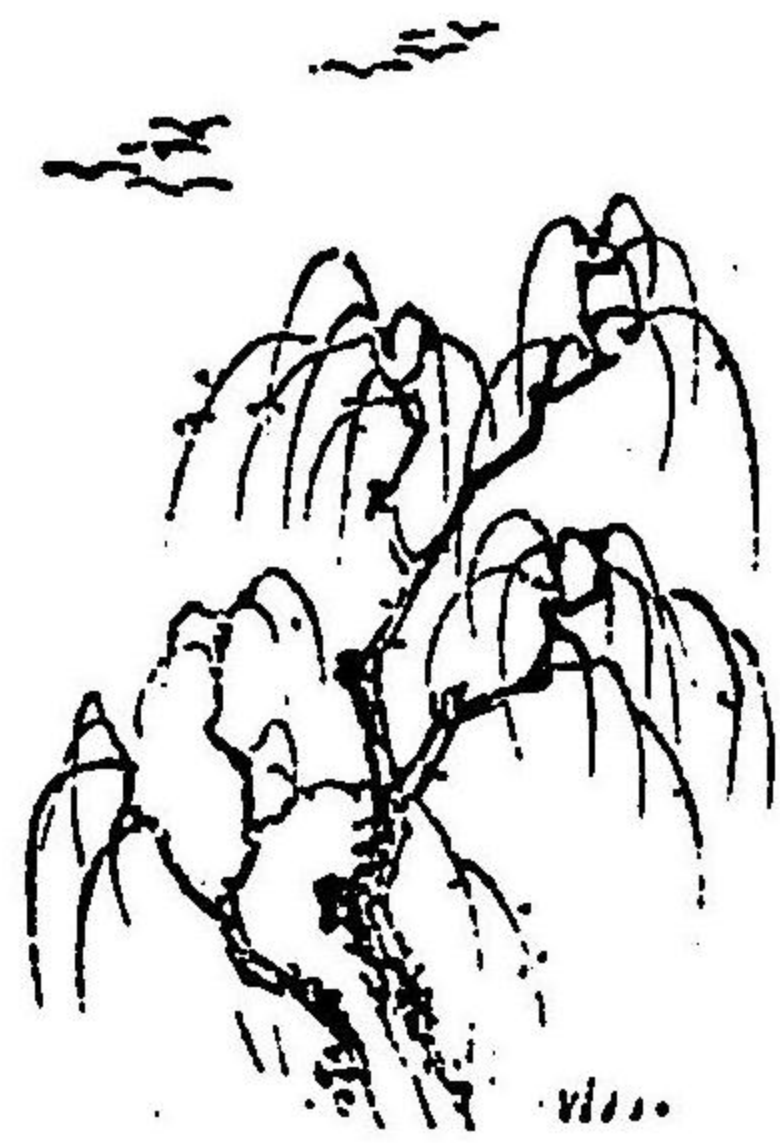
基督にして、彼は其の自ら吐き玉へる幸ひの言「我手と我足を見て我なるを知れ、我れ自らなるを知れ」といふを以て我等に會はん。先に死にし我等の愛する者共も復た生きて其所に在り、彼の中にて生けることを見出ださん。たゞ其れのみならず、彼は我等を神に至らすべく、神の愛は次第に密に更に密に其の温かき羊舎の中に我等を引き入れん。大いなる未來思想は聖書と聖徒と學者等との教へし如く、祝福の幻なり。我等は此の祝福の幻に名を命することを得るも、其より以上何をなす能はざるなり。否、聖バオロは終りの事を我等に告げたり。其は總ての終りの終りにして、神の子自らも總ての物を服はする者に順ひ、かくて神は總ての物を以て總ての

物に充つる時なり。

神なき靈魂不滅の觀念の如何に恐るべきものなるかは、今こゝに指摘するの餘裕なし。人の重なる目的は神の榮光を立つること、永久に神を喜ぶことなり。然れど余は再び危ぶむ。多くの人は舊約の水平面よりすら降り居ることなきかと。今日何人かよく全く眞率なる心を以て「汝の外、我れ天に於て誰をか有たん。我が地に於て望む所、汝の外に何かあらん」と言ひ得るものぞ。バオロは之に答ふるを得たり。彼に取りては生くるは基督、死ぬるも益なりき、何となれば死ぬるは一層多く基督を得るものなるを意味したればなり。彼は人間他の人々と同じく、其の愛せし者ども如何になれるかと搜

したり。而して温和なる永遠の日光の輝く所に彼等の姿變りて存ふるを見んとせり。然も其の愛する者等は基督を衣、基督の中に住み居たりければ、彼の待ちしは基督を待ちしなり、神を待ちしなり。我等若しバオロの愛せし如く愛せんには、又バオロの見出たしたる如く、恩恵より恩恵に移るは、性來のまゝより恩恵に移るよりも遙に輕き變化なることを見出だすならん。露西亞や北極地方に於ては、日は殆んど北に没し、直ちに日の出で來るといふことを讀めり。バオロの勝利の死に於ては、夕榮はいと急に且つ靜かに曙の榮となりぬ。我等も斯くて父なる神を説かなん。「よき音つれをシオンに傳ふる者よ、汝、高さ山に登れ、善き音信をエルサレムに傳ふ

る者よ、汝つよく聲をあげよ、聲を揚げて恐るゝ勿れ、ユダの諸の邑に告げよ、汝の神來り玉へりと』



費もし増さらば

耶蘇答へて言ひけるは、或人エルサレムよりエリコに下るとき強盜に遇へり。強盜その衣服を剥き取りて之を打ち擲き死ねばかりにして去りぬ。斯かる時に或祭司この途より下りしが、之を見過しにして行けり、又レビの人も此に至り進み見て同じく過き行けり。或サマリヤの人旅して此に來り之を見て憫み、近よりて油と酒を其の傷に沃し、之を護みて己が驢馬にのせ、旅邸に携れ往きて介抱せり、次の日出つる時銀二枚を出たし館主に予へて、此人を介抱せよ費えもし増さらば我れ歸りの時汝に償ふべしと言へり。然れば此の三人のうち誰か強盜に遇ひし者の隣なると汝思ふや。彼れ言ひけるは其人を恤みたる者なり。耶蘇言ひけるは汝も往きて其の如くせよ。

(路加傳十〇三十一—三十七)

「費もし増さらば」とは周到なる用意といふべし、善きサマリヤ人の此の周到なる用意に由て、一段の柔かなる光は此の物語の上に差

し添ひたるを覺ゆ。彼は金子を攫み出だして與へざりき。唯だ銀二枚を取り出だして、費用もし増さらば之を償ふべきことを約せり。此れ思ふに貧者が貧者を加くる數多き場合の一例にして、又其の之がために投ずる物の犠牲的なる場合の一例なり。今此の語の提想する所により、基督信徒の務の四階段を述べん。

一、基督信徒の務は供給を以て始まる。彼は銀二枚を取り出だして之を館主に予へたり。我等の爲さざるべからざる事は何等の種類にても、其の初め容易なるが如く思はる。人或る亂醉者の矯正を引き受くることを約するや、保證は確と調印せられ、暫くの間は萬事好都合に進むか如く、救濟者も被救濟者も其の心に喜悅の湧き立つを

覺ゆ。若き處女、貧民學校にて一級を引き受くるや。初は小兒に付て小説の如き空想あり、虹の如き眩惑あり。處女自らの心の中には又一の生命の眞の泉ありて、一時己が心の需要を充たす。年若き傳道者或る教會員を收するの任を負ふや、其の初は實に美はしく、此世に倦み疲れたる者も、此の年少説教者の言に耳を傾くること頗る熱心に、彼等は彼を信じ、彼の心の單純を信じ、彼に於て神の眞の幻を受く。彼も彼等を信ずること深く、後、其れが冷かき容貌と一層冷かき心とならん日來らんとは、想ひも染めざる有様なり。我等は願みて斯くの如き初期を回想す。其の時には朝は露を帯ひて鮮かなりき。精神は軽く飛揚するばかりなりき。生命の風は我等の耳

に新らしき音楽を奏しにき。我等の周囲には少年の狂喜と秘義と充ちたりき。何事も我等に取りて爲すに難きこと無きかの如く見えたりき。我等は夢にも「我れ疲れたり、我れ病みたり、登る途あまりに險峻なり」と言ふ日の來らんとは思ひ設けざりしなり。たゞ新鮮なる朝氣の存せしのみならず。當時は又基督の親切に供へ玉へる供給ありき。彼は其の銀二枚を我等に與へ玉へり。我等は喜ひに喜んで之を受け、又楽しく之を費せり。我等は其の全く消費せられて、更に多くを求めざるべからざるに至る日の來らんことを思はざりしなり。

然り。人は費用を計算すと言はる。實際或る途を以て我等は費用を

計算せざるに非ず。然れども基督信徒の務に於ては、我等は決して其の費用を計算すること能はず。最初の契約の中に何程の入費がこもり居るかさへ、實際に思ひ知ること能はざるなり。一個の弱き靈に付て責任を負ふすら、之が中に合れる意味をよく示し得るものなし。況んや多くの靈に付ての責任を負ひ、異教國に身を投げ出だし長き年月の間苦戦奮闘することに至ては、之を経験する者に非ざれば其の中に合れるものを言ひ顯はすこと能はざるなり。デビッド、ヒル言ひしことあり。「宣教師の生活には、孤獨の感、人間の同情を熱烈に要求する情、凜烈なる北風の如く切り入るときあり」と。大いなる事業を成し遂げし或る聖人言ひしことあり。「余はじめ汝等に付

て責を負ひし時には、此の責任の勞と苦心の如何なるかを全く知らざりしなり。然るに事を知ると共に其等は余の心に生じ來り、困難てふ感は今余が心に加はりぬ。若し己れを見ることを止めて、只管彼の我等が求め若くは思ふ所よりも甚だしく多くの事をなす者のみ仰くに非ざれば、余は今なほ屢々失望すべきなり」と。最も勇敢なりし使徒の心より出てし言の中にも、「責めらるゝこと甚だしくして勢ひ當り難く望をも失ふに至れり」といへるあり。勝利の愛たる基督自らがゲツセマネ園に於ては身を地に投げ伏したるに非ずや。

二、基督教の務の第二段は、彼の銀二枚が終に消費し盡されしを見し時なり。其の時は唯だ青春の美はしさが我等より離れ去るのみならず、若き頃の信賴と勝利とが滅じ行くのみならず、苦痛の低き聲の聞え來るのみならず、實に銀二枚が費し盡されたるなり。初め福音に接せし時の嬉しかりし幻、其れが救ひの力に付ての生ける感覺初めて之を説きし時の誠實と希望、己れと信を共にする人々に對する深き愛、此等はみな昔ありし如くに今あらざるなり。人々は我等を失望させ、我等は人々を失望させたり。彼等は我等を失望させぬアレキサンデルは我等に多くの害を加へ、デマス此世を愛して我等を棄てたり。宛から我等の途はエホバより隠れ、我等の審判は神より過ぎ越せしが如く見ゆ。少くとも我等の若き時の卒直なる信用は掃ひ去られたり。基督と共に「汝等もまた去らんとするや」と言ひ

らざりしなり。然るに事を知ると共に其等は余の心に生じ來り、困難てふ感は今余が心に加はりぬ。若し己れを見ることを止めて、只管彼の我等が求め若くは思ふ所よりも甚だしく多くの事をなす者のみ仰くに非ざれば、余は今なほ屢々失望すべきなり」と。最も勇敢なりし使徒の心より出てし言の中にも、「責めらるゝこと甚だしくして勢ひ當り難く望をも失ふに至れり」といへるあり。勝利の愛たる基督自らがゲツセマネ園に於ては身を地に投げ伏したるに非ずや。

二、基督教の務の第二段は、彼の銀二枚が終に消費し盡されしを見し時なり。其の時は唯だ青春の美はしさが我等より離れ去るのみならず、若き頃の信賴と勝利とが滅じ行くのみならず、苦痛の低き聲の聞え來るのみならず、實に銀二枚が費し盡されたるなり。初め福音に接せし時の嬉しかりし幻、其れが救ひの力に付ての生ける感覺初めて之を説きし時の誠實と希望、己れと信を共にする人々に對する深き愛、此等はみな昔ありし如くに今あらざるなり。人々は我等を失望させ、我等は人々を失望させたり。彼等は我等を失望させぬアレキサンデルは我等に多くの害を加へ、デマス此世を愛して我等を棄てたり。宛から我等の途はエホバより隠れ、我等の審判は神より過ぎ越せしが如く見ゆ。少くとも我等の若き時の卒直なる信用は掃ひ去られたり。基督と共に「汝等もまた去らんとするや」と言ひ

ますべく、凡ての人我等を棄て、脱れ去るとも、亦深く驚きもせざ
 るべし。佛蘭西の物凄き格言にて、ジョン・モーレーの愛する語の
 如く人類を愛するためには汝は彼等に望む所を徹にせざるべからざ
 るなり。然れども此れ固より基督教の語に非ず。人類を愛するため
 には諸君は彼等より多くの事を望まざるべからず。一の靈を愛す
 るためには、諸君は之が將來の汚點なく彼なく凡て此種のものなく
 限りなき生命の嗣子、神の勝の子たることを想はざるべからず。然
 れども此の望む所の實際に現はさるゝ前には痛く試みらるゝ所なき
 を得ざるなり、人は我等に付て失望し、高き方への招きとては絶え
 て來らず、我が言はんとすることは人すてに言ひしが如く、人々は

既に之に倦めり。凡ての愉快なる畫圖の面は、主の日すてに暮れ、
 少年時代の光もはや其上より引き去り、唯だ驢ろげに唯た淋しく
 なり了れるのみ。顧みれば我等は旅邸にて遭難者を托され、之と共に
 其の費用に供すべきものを與へられ、皆まで聞かぬ恵みの言をも
 残されたり。其の時は實に愉快極まりたり。我等が敬神の徳に付て、
 聖潔の徳に付て、成功に付て、全き一致と愛と調和とに付て、夢み
 し所は如何に美なりしぞ。自らの上昇進歩に付て夢みし所は如何に
 大なりしぞ。而して志せし所、又達し得べかりし所に、達せざりし
 こと如何に遠かりしぞ。今や主の物さびしき日來りて、曾ては花の
 如かりし生活を、曠しく冷たきものとなし了れる如く思はる。此れ

基督の僕等に取りて人生の眞の危機なり。之に付て戒められしことは古來稀なれど、其の實在することは極めて確なり。我等は死ぬるを許され居らねば、中止すべきにあらず。基督信徒に取りては或意味に於て死ぬるは常に生くるよりも優れりと雖も、我等は死ぬるを許され居らぬなり。我等は自ら神の意と神の事業となし得る限り生くるを以て更に善しとなす。而して形は異りと雖も他の形にて之をなし得るなり、其の形は初の時に於けると同じからず。夢は消えもせん。望は冷めもせん。盡力は徒らに歸しもせん。愛は失はれもせん。親切は蹂躪されもせん。我等はもはや縁の布く途を踏み行かず。もはや嘆美せられ、稱讚されざるなり。之を最も

善く考へても、我等の前には普通の義務てふ塵多き路の亘り居りて我等の足の下には、曠野の砂たゞ焼け居れるのみなるべし。然も我等は中止せんとはせず。基督信徒の心中には之に抗する或物潜めり曰く『我すてに力の限りを盡したり。されど我は尙しかくせん』『されど我は尙しかくせん』と。此の小聲こそ我等を救ふ所のものなれ。我等をして戦ひを門前にてもり返さしめ得るは神の恩恵に由りて此の感情あればなり。以前には曾て誘惑の達せざりし城、今や攻撃を受く。然も我等は之を敵手に委するを許さざらんとす。我等にして之を能く解得したらんには、此は實に一段高き生活の始まる起點なり、銀二枚の費されたる時なり、我等が基督と其の親切なる

言と共に残し置かるゝ時たるなり。何となれば其の時に我等は自己犠牲の途に立ち出て、顔をエルサレムの方に確と向くればなり。少年時代の打ち鍛はれぬ愛、血色美はしき愛は固より美なり。之が高潔なる途を直覺的に選ぶの様は固より美なり。然れども火を以て味をつけられたる愛、萬艱を堪へし義に至ては更に美なり。生活は初の時よりは嚴峻になれり。されど基督の眼にはかの永久に消え去りしものよりも神聖の美を以て装へること甚だしきものあるべし。基督は或る時までには其の僕等に向つて「汝等惡を拒いて、未だ血を流すに至らず。汝等は未だ眞の犠牲の意味如何を知らざるなり」と言ひ得べし。否多くの人に向つては彼は終りまで然か言ふなり。然

れども其の選べる器たる者共に付ては決して然か言ひ玉はず。サウロに付ては言て曰く「我れ彼が我名のために受くる苦の如何に大いなるかを彼に示さん」と。我が名のために彼は如何に大いなる事を言はざるべからず爲さざるべからざるかとはあらで、如何に大いなる苦を彼は受けざるべからざるかと言ふなり。血を流さずしては高き生活に入るの途なし。基督の經驗は或る有様にて精神的に信徒の身の上に再現せらる。我等は自己を祭壇に献ぐることに由て、基督と一層深く合一せる生命の中、一層幽玄なる生命の中に死に行くなり。

三、第三段は、我等が基督の苦みに與ることに由て、其の復活の力

を得たることを發見する時なり。此の基督と共にあること、此れ即ち聖パウロが苦難の年を重ねし後、尙自ら知らんことを祈りし所のものなり。我等は賜を消費することに由て、基督の測るべからざる富より賑はさるゝことを發見するなり。

利己心と自我とを折ることに由り、我等は死の陰の谷をさへも照す光の中に入り、汪洋たる河の流れの如き平和、澎湃たる海の波の如き義に入り行くなり。我等は基督の如く教を説くことを以て始まり烈しき號泣、流涕、而して終には死にまで進み行くなり。然れども自らを外に注ぎ出だす生命は常に新らしき力を流し入れられ、失ふに従つて益々豊かとなるものとす。若し我等かくて進み行かば、晩

年は或る意味に於て最も悲しき年なるべけれども、然も又其等の年月は最も高尚に最も安定せる年月なるべく、深き意味に於て最も喜ばしき年なるべし。博士デールの傳を讀みし人は或は言はん、「あゝ悲しき晩年かな。若し彼の同輩の友垣崩されずして續き、又彼が非常の熱情を以て助けし計が勝利を以て實行されしを見しならば、彼は一層幸ひなりけんものを」と。余は其の然る所以を知らざるなり。彼の生涯の終りの方は或る意味に於ては悲しき年なりしならん。然れども實は一層高尚に一層安定に一層信すべき年なりしと謂ふべし。其等の年月は確に彼が一層深く基督と共にある關係の中に入りし年月なりしなり。既に然りとすれば他は何も問ふを要せざるな

り。我等が「困難の岡」の險を攀ち登る時こそ、我等が自己の最も善き所に達したる時なれ。高山汝ち夫れ何物ぞ。ゼルバベルの前に汝は平野となるべし。約束は眞に遂げらるべし。此山にて裸となり色を失ひ風になやまさるゝもの、萬軍の主は之を美味を以て饗應し玉ふべし。

さて事業は成らず、苦むものは尙癒されず。然らば此の先如何にすべしか。他なし我等は引き續き費消すべきのみ。主は之を知り、之を暗示せり。曰く「費え若し増さらば」と。初には我等は此の語を聽きおとしたり、其の意味の如何ほど深きやを思はざりしなり。然れども一日は一日より其の意味は我等に明かにせらる。然り我等

は尙この上にも其の上にも費さるべからず。衣服を一枚また一枚と脱き去り、終には我等の心臓の血をまで搾り出ださるべからず。然れども斯く費せば我等は豊かに與へらる。斯く費せば終に基督の測るべからざる富、與へても盡さざる富が、我等の有たることを意識するに至るなり。若し銀二枚が費し盡されたる時、我等其れにて費すことを止めたらんには、我等昔に歸りたらんには、我等すでに新鮮の氣を失へる古き語を繰り返したらんには、我等粗漫に己が務をなしたらんには、我等は既に死ねるものなり。之に反して若し一層高價を拂つて働きたらんには、我等は終に言以へ言ふべからざれど、然も解すべからざるに非ざる左の言を解するに至ら

ん。「我れ基督と共に十字架に付けられたり。もはや我れ生けるに非ず、基督我れに在て生けるなり」とある是れなり。

四、基督信徒の務の第四段は、自ら急に「ピウラ」の地に在ることを見出だせし時なり。基督は多年我等と共に在り、其の生命を我等の荒れたる河床に注ぎて己む時なかりき。其等の後我等は急に咫尺して主を見、「我れ汝等に償はん」との御言を聞くことを覺ゆ。たゞ其れだけののみ。旅館の主人は善きサマリア人の言を受けて満足す。基督は再び來るべし、彼れ來らんととき我等に償ふべし。主の口これを語れり。我等は其の約束の力に由て生くべきなり。博士デールの言へることあり。彼は、己が傳道教會の務を盡し行く間に、若し神の

示せる眞理の大なるものが忘れ居りはせずやと思ひ、之を見出ださんため新約全書を読み通せしに、終に福音書の中に繰り返へし「示されたる報酬の約束を自ら無視しつゝありしといふ結論に達したりと云ふ。人間の同情と喜びと稱讚とは甚だ快きもの、然も我等の前に永遠者の歓迎を控ゆるに非ざれば我等は生くる能はざるなり。使徒等か百倍せる勇氣を以て生命の事業を果せし所以のものは常に其の眼前に未來の報酬を最も明白に有せしに在ることは、新約全書を読む者の見落す能はざる所なり。基督教會が我等の得んため

に走りつゝある確固永遠の賞與に付て考ふること、使徒等が考へしほどに強きに於ては、必ずや新しき熱を以て燃やさるべきや明かな

り、「我れ汝等に償はん」。我等の賃銀が此世にて如何に低くとも、如何に不平を抱かれしとも、如何に支拂ひが遅るゝとも、其等は兎あるも角あるも、基督は祝福を與ふること甚だ確なり。極めて少き報酬も彼の手より來れば其にて十分なりと我等は感ずべく、燦爛たる王冠や、高價なる望を切に求むることはあらざるべく、彼にして唯だ其の「勝つ者には我れ我が傍に座するを許さん」との約束を守り玉は、我等は其れにて満足するならん。其以上に尙進んで、「我が王座に」といふの要とはなけん。何となれば彼の在す所、何所にも王位ならぬなければなり。此れにて尙ほ十分なりとすべからざる乎。此れ最も善きものに非ざる乎。世の中に愛するものと借なることば

ど樂しきはなし、天の上と雖もこれほど樂しく大きく尊きはなし。報酬の約束の中にて、勝つ者には我れ我が側に座するを許さん」といふ約束は、思ふに他の約束に優れたり。萬事我等の前に死ぬるが如く見ゆるとき、我等が風雨を冒して進みつゝあるの時、何人も我等を知らざるとき、我等の貯への費し盡されたる時、我等が困難の岡の最難所に在る時、其時見えざる世界の樂しさが姿を現はし、我等は、「此世には己がために何も存せず」と叫ぶなり。然れども萬物は此世に存するなり。主は決して遠からぬなり。何となれば、「此山に於て主は凡ての民を蔽ひかくせる被覆と、凡ての國民を蔽へる覆面布を顔より破り去るべし」と記されあればなり。彼は被覆を顔よ

り破り去るべし。唯だ之を二つに引き裂くのみならず、之を寸々に破るべし。是れ其の美はしき幻を永久に明白ならしめんためなり。我等と彼の世との間の障壁たりしものは今や簾となりて震へり。我等が死ぬる前に斯かるものさへも止まらざるに至る時來るべし。我等は唯だモーセの立ちし所まで登るを得んかと言はれしが、我等は終には登るべし。超絶せる未來の啓示は我等が最も多額を費しつゝある時に與へらる。靈魂の生血が雨の如く滴る時に與へらる。諸君はバンヤンの譬の「ピウラ」を解するや。何故に「ピウラ」なりや。参拜者が自己等の行かんとせる都の見ゆる所に入りたればなり。其の都や我等の思想し愛し望みたる古き都なり、彼等参拜者は

其の塔と殿堂とを見ぬ。其の民等と雜り合ひぬ。此地にて輝く者等は普通に歩み居ればなり。彼等は次第に之に近づきしに、其の願ひの盛んなるため病を起せり。我等は何所の水少き河の畔にて死ぬるかを問ふの要なし。其の支那たり印度たり英國たる何ぞ關せん。ウイリアム、バーンスは病床の傍に立てる支那人の補助傳道者等に基督の贖の愛を説きながら死にたり。彼等バーンスの遺産を調べしに、唯だ支那語及英語の聖書と、質素なる支那基督教徒服一襲と、福音船の青色旗一枚と、唯だ其れのみなりき。一同恐れを以て靜まりかへりたる中に一小兒、一確に彼は甚だ貧しかりしに相違なし」と言ひたりとぞ。

斯くの如く基督信徒の務の奉行に於ては最後か最美なり。銀二枚の費し盡されたる後、尙長さ間更に多くを費しては又費し、而も其はもと我等のものならぬを前よりも遙に多しと自ら知りつゝ費したる時が、我等に取りての最善最美なるべし。約束は上昇を示す。人には見えざれども此は實際なり。『彼等は驚の如く翼に由て上り行くべし』。尙これよりも尊さは。『彼等は走らん而して疲れざるべし』。而も最も尊さは、『彼等は歩むべし而して氣力を失はざるべし』なり。此れ契約の恩恵の絶頂なり。

古人の如く我も彼に従はん

唯だ異なる途に於てするのみ

此の世の光微かになり行く時

我が心は既に聖歌うたひつゝあり

曙光の晝になる聖歌を。



眞の愛の活動

夫れ神は其の生み玉へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉へり。此は凡て彼を信する者に亡ふることなくして永生を受けしめんがためなり

(約翰傳三〇十六)

或人は曰く、「宗教は進歩せしか退歩せしか、其は何れにせよ兎に角萬事と共に變化せり、今日までの信仰箇條は簡單にして嚴格なりき。正と邪とは我等に取りて天國と地獄とを意味し、多と少といふ程度の問題にはあらざりき。今や基督教は何ぞやといふことをば、何人も我等に示し得ざるべし」と。甚だしきは基督教も廢跡なり。眞理と平和の古き殿堂の基礎は忘れられたり。宏壯なる會堂の如きも、光

榮ありて而も悲惨なりし迷妄の空しき紀念碑なりとまで言ふものあり。思想と智識の無限に進歩せること、人心の勵み勉むる所には、何所にも光明が絶えず大水の如く注ぎ入りしことは、我等の固より否定せんとする所に非ず。凡ての基督教會は聖靈の導きに從ふべき權利と義務とあることは、我等の常に思ひ常に説く所なり。然れども福音は之に由て何等の影響を蒙ることなし。我等は若し力に及ばば福音先が之を説きしよりも一層完全に之を説き得るなり。其の福音は他に非ず。夫れ神は其生み玉へる獨子を賜ふほどに世を愛し玉へり。此は凡て彼を信する者に亡ふることなくして限りなき生命を受けし

めんがためなり』といふ是れなり。之を説き明さんため、余は大なる一説教者に倣つて之を(一)湖(二)河(三)水壘(四)汲むことの四段に分割して述ぶる所あるべし。『神は……ほどに世を愛し玉へり』これ湖なり。『其の獨子に與へ玉ふほどに』これ河なり。『凡て彼を信ずる者』これ水壘なり。『永生を受けしめん』これ汲むことなり。

一、湖は神の愛なり。『神は……ほどに世を愛し玉へり』。先づ基督信徒中此の大なる言を意味一杯に解することとを避易する者あるに付ては此に一言するの無益ならざるを知る。彼等は此の言を以て選ばれたる罪人等を意味するものなりとさへ解釋せり。其の斯くの如

く甚だしからざるものも、此の喇叭の響の如く明亮なる宣言を其のまゝに解釋せざりしなり。『神は愛なり』てふ語は、信仰問答にも信仰告白にも見出だされず、余の記憶する限りにては、改革教會の何れの信仰告白にも出て居らざるなり。然れども其は何等影響する所なし。至上の標準たる神の言に歸り行けば、之に此の秘義の在るを見出だす、神は世界と世界の各々の靈を愛し玉ふ。團體の愛は個人

の愛なり。各自の靈は一つ／＼宛がら他に人なきが如く愛せらる。之に限りとはあらざるなり。神は我等の墮落せる族の靈を一つ／＼愛し玉へり。最も悪しき者、最も人に忘られたる者、神の胸に抱きしめらる。是れ容易く語り得べきことに非ざるなり。基督の之

を語るまでは何人も之を語らざりき。基督の後と雖も、其の最も信仰ある僕どもは、多く之を繰り返すことを恐れたり。余の忘るゝ能はざるは、教授エルムスリーが其の死ぬる前の短き人事不省の間に於て、其の心は失はれつゝも、幾度となく繰り返しては、「神は愛なり神は愛なり、我は出て行きて全世界に之を告げん。彼等は之を知らざるなり」と言ひしことなり。

然は言へ、最も信仰篤きものは、時として之を繰り返すに當り、唇の震ふことを禁する能はざるべし。世界の悲惨は目の前に見え來り彼等の口を抑ふるが如く思はる。人生の苦惱の中に何所に愛の跡ありや。此の解すべからざる世界の重荷と壓力は、時として我等の何

れにも重すぎるなり。

自然は獲物を以て齒を爪とを赤くし

此の教義に反對の叫聲を揚ぐるなり

悪^{アク}の感^{カン}、罪^{ツミ}と悲^{カナシ}みの感^{カン}、不^{トク}徳^{トク}と不^{トウ}道^{ドウ}の感^{カン}、何^{ナニ}れ^ニ向^ムき^テも景^{ケシ}色^{シキ}を汚^{ケガ}せり。乞^コふ世^セの悲^{カナシ}みに付^ツて思^{おも}ひ見^みよ。幼^{コウ}兒^ジは幸^{コウ}福^{トク}にせられんとして初^{ハジ}めに於^おては此^この幸^{コウ}福^{トク}のた^ために善^{ゼン}盡^{ツク}し美^ミ盡^{ツク}せる供^{ケウ}給^{キョウ}の備^ボへられしが如^{ごと}かりしも、少^{セウ}年^{ネン}時^ジ代^{ダイ}の快^{クワイ}活^{カツ}は次^ジ第^{ダイ}に壓^{アツ}倒^{トウ}せられ行^ゆくを見^みる。これほど見るに悲^{かな}しきことはなし。蠶^シく^い鏽^{コウ}く^さり、盜^ネは穿^ウて盜^ネみ、誘^{ユウ}惑^{カク}は起^おり揺^ゆすりて打^ウち勝^カちぬ。孤^コ城^{シヤウ}落^{ラク}日^{ジツ}力^{リキ}の限^{かぎ}りこれを守^{まも}れども、攻^{コウ}撃^{キキ}は思^{おも}はぬ方^{かた}より來^{きた}りて我^{われ}等^らを攻^せめ落^おすなり。進^{シン}歩^ポも發^{ハツ}見^{ケン}も以^{もつ}て

重荷を軽くし、苦痛を減ずるものなし。善悪には避けらるべきもの
 ありもせん。されど死と罪とがある限りは禍は存すべく、世界が古
 くなればなるほど、人は益々烈しく苦痛を感ずるに至るべきは疑を
 容れず。痛みはいよいよ厳しくなり、瘡はいよいよ深くなりて、而
 して癒ゆることはますます遅くなれり。世の悪、即ち善の敗北、悪
 の勝利に付て我等は何といはんとするか、正しき者の亡ぶる、此れ
 既に残酷なり。然れども何人も之を心に留めぬに至ては、残酷更に
 甚だし。存在の暗黒なる謎と、不思議に不規則なる事とに付ては、
 我等は黙して恐るゝの外なきなり。
 されば我等は、神は果して斯くまで罪に由て恐ろしく形を崩せる我

を愛し得るや」と言はんとす。キープルの如き温厚なる基督教詩人
 も、聖徒の心は人間の詮索を堪ふる能はずと言へり。
 されば和ぐる覆面布を
 恵みを以てかけたるまゝになし玉へ
 我等の真相を見ると雖も
 我等を愛し得る汝なれば
 神、ネロを愛すること有り得べきか、ユダを愛すること有り得べき
 か。神、聖徒や殉教者を敗北と憂悶と死とに委しながら、之に心に
 留むといふこと有り得べきか。或人は聖ペルナルドの疑問と同じ
 やうに思想し居れるなり。聖ペルナルド冥想に我を忘れつゝシエネ

ヴァ湖の畔を騎行せしが、夕方問ふて曰く「誰か湖を見しや」。我等は答へん。「何人も曾て湖を見ざり」と。然も我等は神の恐るべく大いなる性質を知れり。

凡ては「愛」に仕ふるものにして

其の聖なる焔に養はる

二、蓋し其の然る所以は神の都を、濡ほす河あればなり。我等は河を知るが故に湖を知る。神は其の獨子を與へ玉ふほどに世を愛し玉へり。眞の愛の経程は決して平らに流れ行かず、神の愛の進路は實に暴なり。我等は平易なる途開かれたり、門はもはや狭からず、路はもはや隘からずとは説かず。否、神は「賜ふ」ほどに愛し玉へり。

彼は唯だ其子を遣はせしに非ず。其の以上をなし玉へるなり。彼は其子を與へたり。使徒が一層完全に言ひ顯はせし如く「彼は我等凡てのため之を死にわたせり」。此れ神の愛の進路なり。天父の愛は贖ひの源なり。彼は愛に於て與へたり。主は自らを愛に於て與へたりと言はゞ最も眞に當れり。イサクは喜びつゝも盲目にして犠牲にせられんとせしが、基督は喜んで又目を開いて其の十字架に上れり「犠牲と供物とをば汝は好み玉はざるべし。然れども汝は一の體を我に備へ玉へり」。其は辱しめらるべく、苦しめらるべく、十字架につけらるべき體なり。「見よ我れ來れり。書冊の中に我事は記されあり。我神よ。我は汝の御心を行ふを樂みとす」。人もし古くして嚴酷なる

神學より脱出せしと思ふとき、神は愛なりてふことを偽りの意味に
て教ふる時、其所彼等を答むるものは此の句なり。我等神の愛を説
けばとて、厭ふべくなり又感情的になりはせざるなり。我等が神の
愛の進路に従ひ行くときに、生命と救ひとは益々嚴肅になり、罪ほ
益々恐ろしくなるを見る。

『ロバート、エルスミア』や、之に先だちて出てし文學、又之に續き
し文學に於て、屢ば問はるゝ所の疑問、何が故に我等は宗教の苛酷
と悽愴とを脱れて、唯だ神の父なることを説くを以て満足せざるか
といふを質されもせば、其の答へは至て明白なり。曰く世をして神
の愛を信ぜしむるの一の證據は、耶穌基督の十字架なればなり。

獨逸の偉人言ひしことあり。『我れもし神ならんには、世界の悲惨は
我が心を劈くべきなり』と。是れ思はざるの甚だしきものなり。世
界の悲惨は既にかの大いなる心を劈けるに非ずや。彼は實に我等の
愛ひを荷ひ、我等の悲みを負ひ行き、血をさへ流し、心の張り裂く
るにさへ至れり。何が故に神は父なり、萬事は善かるべしと言ふの
みにて、基督をば棄て去らざるか。何が故に聖書の句を『神は凡て
人に永生を與ふるほどに世を愛し玉へり』とは、讀まざるか。若し誰
にても神は愛なりと稱ふるならば、其は如何なる事實を根據として
言ふなるか。其人は周圍の世界を漂はし居れる悲惨と悪との海の中
に、尙神の愛を見出だすにや、神の愛の信仰は唯だ十字架の陰に於

てこそ維持せられ傳播せられたれ。之より離れて何所に神は父にして、唯だ勢力には非すといふ證據存するや。舊約全書に於て之を臚る氣に示す句はありと雖も、人々は之を知らざりき。時来て基督は來りしが、世の人の心は仆れんとしつゝありたり。之より先殉教者等相次ぎ、預言者等相次ぎ、一の兆候をも見ずして死ねり。基督は十字架を王位に變へ、經帷衣を花衣に變へ、死を眠りに變へ、敗北を永遠の勝利に翻したり。

三、然れども斯くの如き愛も、我等が水壺を取るに非ざれば、唯だ霧地に戶外を流れ去り、絶えて我等に來らざるべし。水壺とは何ぞ「凡て彼を信する者」とある其なり。我等は皆な何が信すべく、何が

我等を欺くものなるかを知れり。信じて而して之を續け、終には崩れ廢たれたる偶像の中に座するを見出だすに至るは人の自然なり。人間の助けは失はるゝことあらん。然れども我等には神の助けに自らを委するの瞬間あり。基督を信するは、唯だ知力を以て、彼に付ての眞理を信するのみに非ず、我等の心を彼の手に委することなり。此の呼吸、初は決して知り得られざるなり。然も凡ての基督信者の生活に於て、(其の記憶せらるゝにせよ、せられざるにせよ)、斯くの如く變化する時の起ることは余の明かに信する所なり。眞實に年月を高尙に用ひんと勉むる人の生活には、何人にも下り途盡きて上り途となるの點あるを常とす。其の出來事は何ぞや、思ふに或る熱さ

羨まじの言が、聖靈に由て心に注ぎ入れられしもあらん。或は生涯の終りの方悲惨を極め、暗愴寒冷にして冬日の申下の如かりし人の死に接せることもあらん。或は心を確と向け居りしものに付て失望し、之か慰めのために靈の避け所、靈の愛人に心向くることもあらん。女の如く花園に座して、「彼人なりしか。彼人ならざりしか。若し彼人ならざりしならば、何所より我は來りしか。若し彼人ならば我は何者ぞ。我は我一生を何を爲して送りつゝありや」といふ古き謎を繰り返しつゝある者には、一の聲の響きて之に語るを思ふ。

「我が在るが如く働け。汝は我があることを知らん」と。女これに従へば彼は直ちに自らを現はし給ひぬ。經驗の途が此の物語の如きと

否らざるとを問はず、其實質は常に同じ。即ち此世にても永世にても、生をも死をも、之を全世界の主に委ねることなり。然かせば水道は此の乏しく狭く足らぬ我生命と、愛の大いなる湖との間に通し神なる愛人は靈に入り來るなり。

四、「亡ふる事なくして永生を受けん」この「亡ふる」といふ不祥の文字こそ實に意味深けれ。神の結合と作新とを離るれば凡ての生命の向ふ所唯衰頹と死とへの途のみ。此れ自然界に於て眞なることなり。而して又考ふれば、精神界に於ても眞なるを見る。若し聖書の言ふ所を措かんと欲するならば之を措け。而も大いにして嚴かなる報復の實在あるを如何せん。此の實在は近代人か其の心にて基督教

に逆らふ時と雖も、尙其心を強く、壓ゆる所のものなり。聖書より「地獄」といふ語を除き去らんと欲するならば之を去れ、然も世界より之を除き去ることなきに非ずや。地獄の火は我等の四面に燃え居れり、此の説教を聴く男女の中には、若し己が曾て心狂ひし刹那を握み取りて、之を過去の歴史より抜き去ることを得ば、己か總ての身代をも棄つるを辭せずと思へる人もあらん。我等をして己れの衷にあり、又己れの周圍に在りて、存在を壓へ、切り刻み、汚しつゝある惡の實在を除かしめ得る力とは、世に絶えて有らざるなり。明瞭にして恐るべき形にて現はれたる滅亡は、我等悉く之を見たり。若き輝ける生命の、雲に蔽はれ、暗くせられ、荒され、毀たれ

たるをも見つ。然れども之より更に普通なるは、幾分亡ひつゝある者なり。或は人生に於て成功し、其の低き野心を達し、其の郷黨の間に好評あるに至りし人にして、然も之を見れば亡ひ居るものあり即ち彼の理想は失せ、彼と造り主なる神との間には交通絶え、其の靈は去り逝けるなり。檻樓を着て亡ぶる者よりは絹と大羅紗とを着て亡ぶる者が多し、國民は大勝と外形の富とに榮ゆる時代あらん。然れども其の心に肉慾の鬼を有せんには、既に滅びけるなり。終には外形も内實と相かなふの日來りて、神の審判あらはれて至るべし如何にせば亡びより救はるべきか、彼の火を活かせて持ち居ることなり。彼の火とは何ぞや。高峻の精神なり。非世俗的なる心なり。

死を辭せざることなり。清潔、眞理、好善を翹望するの情なり。凡て彼を信するものは亡ぶることなく——更に進んで曰く——限りなき生命を得ん。

生命は愛の河より汲みたるものにて、死の至らぬ所のものなり。我等の主は自ら死にて又甦りし時に此の約束を成し遂げ玉へり。此に由て我等は知る。死の嚴肅なる事實は、贖はれたる生命の繼續を斷たざることを。生命の主、墓に横たはりて復た活きし以來、墓は彼に合へる體の休息所たるなり。然れども余思ふに、年月進み行かは、我等は死を視て生命の大敵となすことなきに至らん。世には之よりも悪しき者存す。内には誘ひ外にも誘ひあり。我等は内外の戦

によりて切れ／＼に裂かれんとす。養え立つ欲情、盛んなる慾望、暴戾なる野心、靈を襲ふては之を傷け、屢々生命の全く押し消さるゝに非ざるかを危ふましむ。然れども其の刹那我等は尙信ず。我等は復活の子供にせられたり。此世も愛ひも押し消すこと能はざる生命を與へられたり。年いくつとなく重ならん後、「神に御榮えあれ、燈火は幾千度風に瞬きしも、終に消え失せさりければなり」と言ひ我等は存在の變化に己れの分を盡せり。時としては己か分よりも以上を盡したるが如く覺ゆといはん。「世界は言へり、過ぎ去るなり」と。然れども我等もし基督に在らんには、我等の衷に曾て生き、今生き、後生さん或ものあり。此の生命に付ては我等未だ曾て其の生

くるに値せるやを問はざりしなり。體の生命、此の世の生命、悲み
 を以て重く押し着けられ、煩慮を以て烈しく打ち碎かれたる生命の
 方は、之を極めて軽く捉へ置くに至らん、此の生命は日を逐ふて縮
 み、衰へ、次第に低く沈み行く。多くの人々は之を待ち遠しとし、
 其の終らんことを切望す。或は亞米利加の詩人と感を同うするもの
 もあらん。

我れ夜臥して眠りの淵に沈まんとせしこと

幾度なりしぞ。

此の淵の深みには夢もなく

煩はしさうつし世の記憶も

絶えて押し寄することなし。

然も余は此の虚無の中

感情もなく思想もなき所に

沈み入るの力なくして

長き間その岸邊に

空しく横たはり居らざるべからざる身ぞ

自ら憐れむこと切りなりき

斯くの如き熟睡の

恵み深き黒幕あけて

光ある晝再び立ちかへり
 其の一たひ怠られたる煩慮と悲愁とを以て
 再び我が靈魂を壓迫し初め
 長く彼方に亘れる遠望に於て
 先々の朝また朝が灰色をなしつゝ、
 單調に展ひ擴かりて、
 どこまでも狭くなり行きて而も盡さぬを示す時、
 其時幾度となく我は再び生くるを厭ひ
 死ぬるは遙によからんと言ひしが
 然も何故とは知らず我は依然として

死ぬることを恐れたり。

我等は此世と肉と悪魔とに對して戦ひつゝ生きたり。弱く信なく心
 定まらず卑怯なりき。後戻りしては又後戻りし、若し恩恵が人間出
 のものならんには、倦みて疲れしならんと思はるゝまでなりき。然
 れとも尙神恩に由り我等は舊に歸らざりき。尙身は甚だ遠く在り、
 歩みは止まり居り、無數の墜落の坩を以て塗れ居れりと雖も、我等
 は顔をシオンに向けて、其の途を求めつゝあり。若し然りとすれば
 長き間の誘惑の中に燃え來り、尙光を存し居れる此の危ふき焔も、
 彼の國に於て安全となり且つ永續するなるへし。其所に入る者ほ決
 して死ぬること能はされはなり。

「神は其の獨子を賜ふほどに世を愛し玉へり。凡て彼を信する者に亡ふることなくして限りなき生命を受けしめんがためなり。」諸君これを如何となす、神は今余をして其の福音を諸君に告げしめ、唯今此所にて其子と其生命とを諸君に提供せしむ。彼の言は地の極にまで出て行き、諸君自身にも達したり。「かゞみて汲み、而して生命を得よ。」我等豈誰彼の別なく其の永遠の生命を有し、之を捉へ、之を養ひ、之を保たずして可ならんや。

●青年會同盟新刊

ボスウオルス教授著
神に到るの道
郵定 税假 貳八 錢錢

バラントイン博士著
馬可傳に寫されたる
耶蘇の面影
郵定 税假 貳六 錢錢

柏井園著
聖書手引
郵定 税假 二八 錢錢

日本
文 萬國青年大會講演集
（郵定 税假 五拾 錢錢）

モット著 開拓者編輯局譯

學生生活に於ける耶蘇基督の力

郵定 稅假 二六 錢錢

フイシヤ著

英ヂヨン、モツト

郵定 稅假 貳貳 錢錢

キンケ著 田中達譯

品性の奮闘

郵定 稅假 二拾 錢錢

フライヤン演說 内ヶ崎騰次郎譯

平和の君

郵定 稅假 二八 錢錢

内村鑑三著

基督信徒の特徴

郵定 稅假 二三 錢錢

青年會讚美歌

郵定 稅假 貳貳 錢錢

明治四十年十一月四日印刷

(定價拾貳錢)

譯者

富永德磨

東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷人

島連太郎

東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷所

三秀舎

東京市神田區美土代町三丁目三番地

發行所

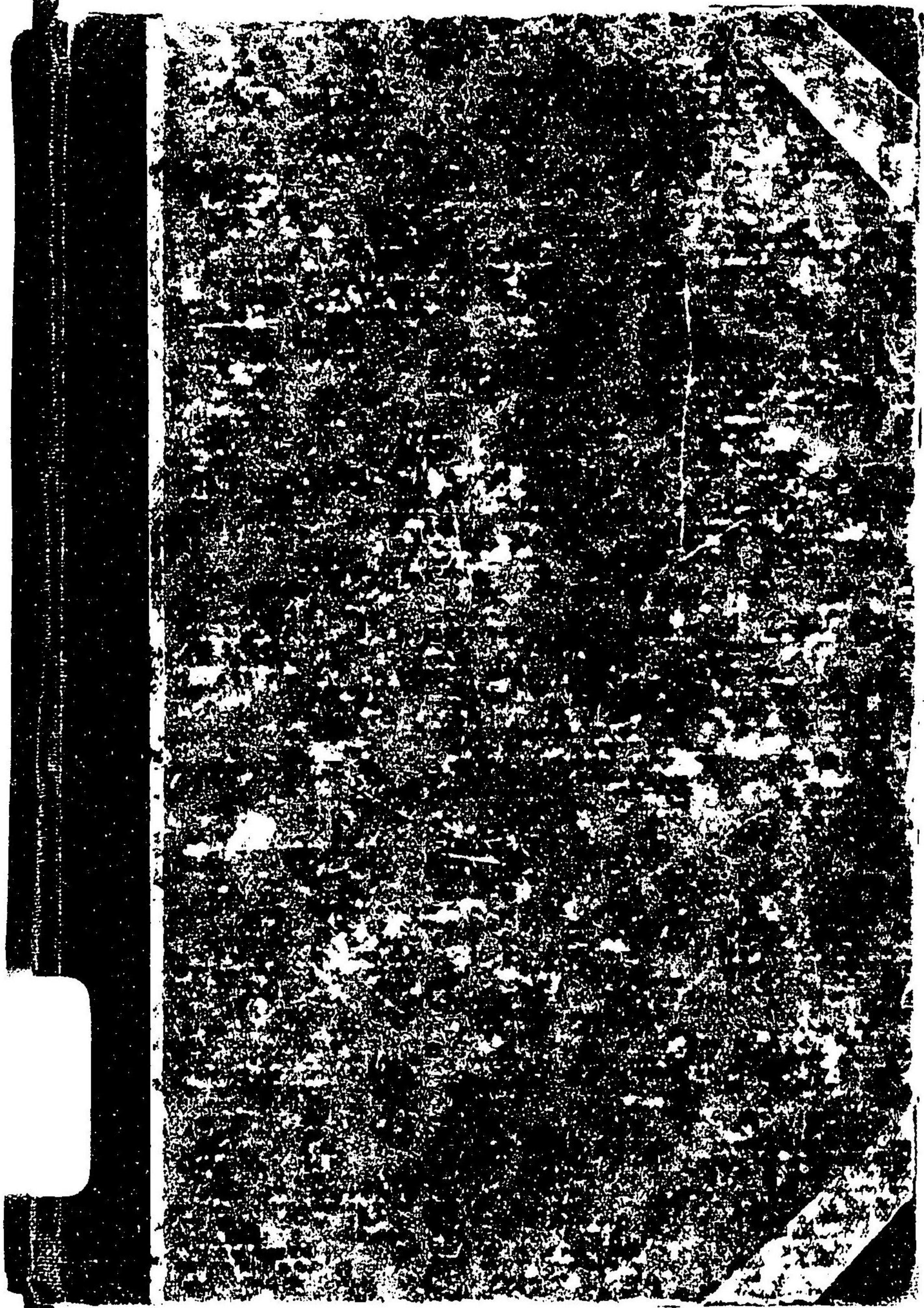
日本基督教青年會同盟

電話號碼百五十六番

LAMP OF SACRIFICE
ROBERTSON NICOLL, LL. D.

94

523



94
523

020359-000-5

94-523

犠牲の燈

ロバートソン・ニコル/著

M40

ABI-0166

